コラム

子どもの危険を判断する基準
「リスク」と「ハザード」

いえもん

いかに子どものケガを防ぐか――。子どもと関わる人にとっては、避けては通れない課題でしょう。この問いに対して、子どもの施設等では子どもがケガをしないよう対策を練っているところもあると思います。しかし、子どもは危険に少しずつ触れることで自分の身を守る方法を体感し、さまざまな困難や限界に挑戦してみようという気持ちを育んでいきます。「子どもの遊びにケガはつきもの」という考え方を前提に大きなケガや事故を防いでいくことも大切です。

プレーパーク（冒険遊び場）では、危険を「リスク」と「ハザード」の２種類に分けて考えています。「リスク」とは自ら挑戦する危険のことで、自分の限界に挑戦し、乗り越えていくという成長のプロセスでもあります。一方で、「ハザード」とは自分から挑戦できない隠れた危険のことを指します。例えば、ハンモックのロープが摩耗して切れる、腐食した柱が折れる、綱渡りのロープが首の高さに張られているなど、遊んでいる子どもには予測できない突発的な危険は「ハザード」を指します。子どもの目に見えないこうした「ハザード」を取り除きつつ、子どもの成長につながる「リスク」をいかに残せるようにするかがポイントです。

前述の問いに答えようと、危なっかしい遊びを片っ端から禁止することもあります。近所の公園に行けば､ありとあらゆる遊びが禁止されているのもそれが影響しています。しかし、大人から「危ないからやめなさい」と言われても、子どもがケガをした経験や危険な遊びをしたことがないと、「なぜ危ないのか」を理解することができません。一方で、子どもは遊びの過程で起きたケガを通して、「〇〇の方法では危ないから、次は△△の方法で挑戦してみよう」という気づきが生まれると、自分自身でケガをしないように行動していきます。

安全管理の指針となるリスクマネジメントを細かく設定することは、子どもの行動の先回りに過ぎません。リスクマネジメントが悪いわけではないのですが、子どもの遊びから「ケガをする」ことを抜き取ってしまうのではなく、ある程度の危険要素を残して、子どもの成長につながる環境づくりを考えてみませんか。ケガを通して気づき学ぶ“遊びの力”を信じて、子どもの遊びをじっくりと見守っていきませんか。

コラム　常にフラットな目線で

よっすぃー

以前、子どものキャンプで、キャンプ当日にアレルギーがあると参加者から聞いて驚いたことがあります。参加者から「牛乳は飲めない」と話があり、乳製品からカレーのルーまで、成分表を全部調べ、対応できるものとできないものとを確認しました。保護者の方との確認で牛乳アレルギーは、重度のものではなかったものの、もし、知らなかったらと思うとぞっとしました。皆さんもこのような経験はありませんか？

参加者の情報は、特に『命にかかわること』については、必ず事前に知っておく必要があると思います。参加が決定した際に、保護者の方と事前に連絡を取り合うことで、配慮できることもありますし、不測の事態を想定することも可能になると思います。そしてそれは、すべての子どもたちを受け入れることができる体制へとつながっていくと思います。

しかし、情報の中には、普段は「消極的なので」とか、「いつもじっとしていない」とか、他の情報もあったりします。中には配慮しなければならない事柄もありますが、このようなキャンプやイベントでは、日常とは違ういろいろな場面で子どもたちの様子が変化する場合もあります。そのため、参加者に対して、フラットな目線でいることが重要だと思います。

キャンプの最後、参加者がふりかえりをしていた時のこと、「僕は、すこしはじっとしていなさいと注意されることがよくあるけど、ここに来て〇〇さんから、自分からすぐ行動できるのがすごいって言われました。うれしかったので、またここに来たい。」というコメントを聞きました。本人の居場所の一つになったと感じた瞬間でした。

いつもは消極的な子どもも、体験を通して積極的にかかわるようになったりすると、情報の中にある言葉だけで子どもたちを見てはいけないと思い知らされます。非日常体験によって、その子の普段とは違った良い部分が引き出されているのに、普段と同じようにその子を見てしまっては、せっかくのチャンスを見逃すことになってしまいます。その良い部分を発見し認めることが、私たちの大切な役目だと考えています。

コラム

ふりかえりは、「活動の良し悪し」ではありません。

プーさん、おーちゃん

そもそも「ふりかえり」は、「活動の良し悪し」を判断するものではありません。

ふりかえりとは、活動した本人がその活動から得られた気づきや学びを確認するためのものです。

活動した後にふりかえり、そこから得られた気づき・学びを日常生活や社会生活（地域、学校、仕事等）にどう生かしていくのかが大切なことです。

活動とは、「キャンプ」や「子ども祭り」、「カヌー・カヤック」、「ボランティア活動」、「地域活動のサポート」、「イベント企画・運営」等さまざまです。

具体的な、「ふりかえり」は、以下のような方法があります。

① 少人数グループ（２～６人）で、自分の変化や感想、気づいた点を発表し、それを全体で発表する。他のグループで出てきたことを共有できる。
② 全体で自分の変化や感想、気づいた点を一人ひとりが全体の前で発表する。全体の人数が少ない方が、ハードルが低く発表しやすくなり、短時間ですむ。
③ ふりかえる項目を設定したふりかえり用紙に、一人ひとりが記入し、貼り出し共有する。（無記名、記名はその集団の状況による）。ふりかえる項目は、例えばグループで協力する活動であれば「協力できたか」「グループに貢献できたか」「活動の前後の自分の変化は？」等がある。
④ ①②を行う前に③のふりかえり用紙に記入する方法もある。
⑤ 他の参加者に、「よかった点」「気づいた点」「改善点」等を批判でなく前向きな表現でメモ書きし渡す。その際に記名した方がその後につながる。
⑥ 自分の気持ちを自分の言葉で表現するのが難しい時がある。そこでプロジェクトアドベンチャーで利用されている「FULL VALUE CARDS（フル　バリュー　カード）」等を利用し、何かを媒体にして自分の気持ちを表すこともひとつの方法である。

「ふりかえり」は活動の結果ではなくその過程で起きたことを文字通りふりかえることで、人が成長していくためにとても重要なことです。

※ 「FULL VALUE CARDS（フル　バリュー　カード）」は、写真（60 枚）や文字（100 枚）の多様なカードで構成され、その中からカードを選び、それを媒体として今の自分の気持ちを表してみるというものである。

コラム　青少年支援･指導者に求められる参加者等に対する配慮とは

プーさん

子どもも大人も一人ひとり違った個性・特性を持っています。

障がいがある方、LGBT の方、外国籍の方等すべての人々が同じ社会で生活する権利を有します。

神奈川県では県立津久井やまゆり園における痛ましい事件をきっかけに、平成 28 年 10 月 14 日「ともに生きる社会かながわ憲章」が定められました。憲章の中で障がい者への偏見や差別を排除し、すべての人のいのちを大切にすることで、誰もがその人らしく暮らすことのできる地域社会の実現を目指すことを謳っています。

青少年支援･指導者は地域で活動するにあたり、子どもや大人の前に立ち、話をしたり、活動の中で言葉をかけたりすることがあります。その際に上記を踏まえ配慮しなければならないことがあります。そこで以下について十分に理解しておくべきでしょう。

・障がい者：身体障がい、知的障がい、精神障がい、発達障がいを含む。
・LGBT　L：女性同性愛者（レズビアン、Lesbian）
　　G：男性同性愛者（ゲイ、Gay）
　　B：両性愛者（バイセクシュアル、Bisexual）
　　T：トランスジェンダー（Transgender）
・外国籍や特定の民族に対する差別
　外国籍：日本国内において日本以外の国籍のことを指す。
　ヘイトスピーチ：特定の民族や国籍の人々を排斥する差別的言動がいわゆるヘイトスピーチである。こうした言動は、人々に不安感や嫌悪感を与えるだけでなく、人としての尊厳を傷つけたり、差別意識を生じさせたりすることになりかねない。
・ハラスメント（Harassment）
　いろいろな場面での『嫌がらせ、いじめ』のことを意味し、その種類はさまざまだが、他者に対する発言・行動等が本人の意図とは関係なく、相手を不快にさせたり、尊厳を傷つけたり、不利益を与えたり、脅威を与えたりすることを指す。

すべての子どもや大人に対して差別的な言動、ハラスメントな言動・行動をすることは許されないことです。障がいや性別等に関係なく、すべての子どもや大人が、心穏やかに活動に参加できる環境づくりのために、スタッフ間で共通認識を持ち、行動・発言・言葉かけに配慮すること、また一人ではなく複数のスタッフで対応することが大切です。